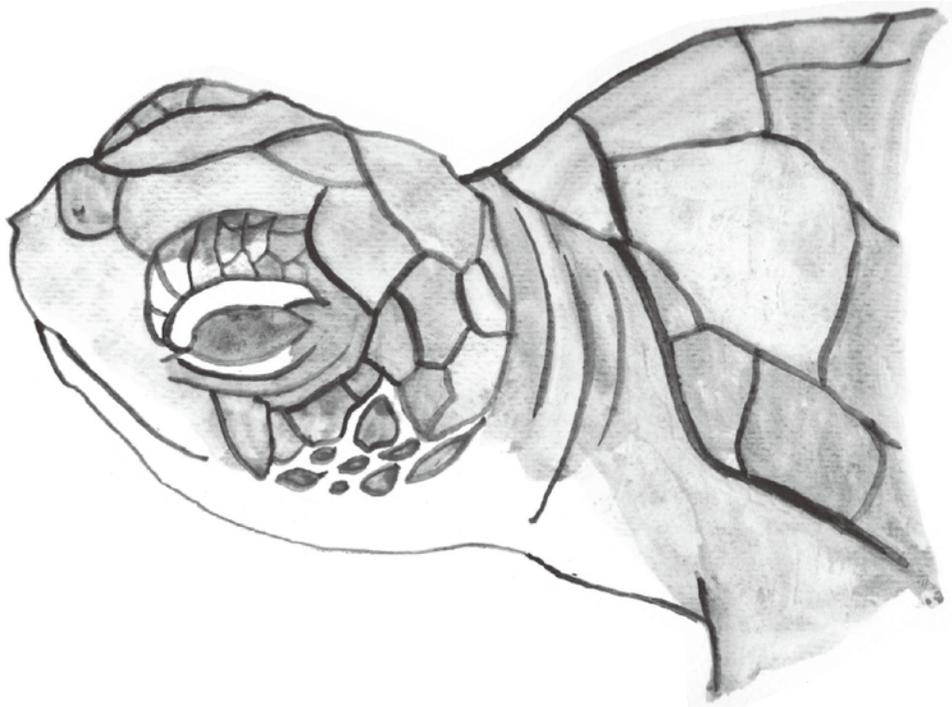


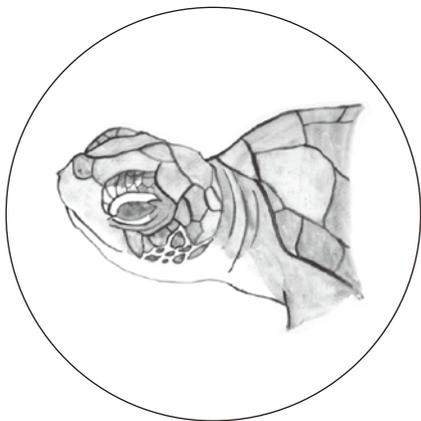


Marine Turtler

マリンタートラ

特定非営利活動法人日本ウミガメ協議会機関誌
第28号





表紙の絵 平井 紗綾

今号の表紙の絵は事務局の平井が描きました。新春らしく旅立ちをイメージさせるアオウミガメの子ガメのイラストです。昨年は元号が変わるといふ大きな節目の年でしたが、日本ウミガメ協議会も設立30周年を迎えることができました。今年も皆さまの一年が希望に満ち溢れた年になりますように！

余談ですが、表紙の大役なので、息子の絵の具を借りてはりきって色づけをしました…マリンタートルはモノクロ印刷だと後から気づきました。これならば得意分野の骨格標本のイラストにしておけばよかったです…。次回描く機会があるならば、モノクロでも構わないホネを描こうと心に決めました。

表紙の絵を募集しています！

皆様から表紙の絵を大募集しています！！可愛いイラスト、リアルなウミガメ、ウミガメをモチーフにしたデザイン等々、ウミガメに関するものでしたらどんなものでも構いません。

ウミガメを見る機会のある方や、日頃から深くウミガメに関わりのある方はぜひ一度描いてみてください。皆様からの素敵な絵をお待ちしております。

- サイズ：B5
- 色：自由(仕上がりはモノクロになります)
- 期限：〆切はありませんが、次号の掲載をご希望の方は、お早めをお願いします。
- 応募方法：大阪事務局に郵送又はメールでお送り下さい。
- 送付先：〒573-0163 大阪府枚方市長尾元町5-17-18-302

日本ウミガメ協議会 マリンタートル編集部

メール info@umigame.org (件名に「マリンタートル表紙」と明記の上お送り下さい)

会報の名称マリン・タートル(Marine Turtle)は、英和辞書には載っていません。

つまり、教育的にはあまり相応しい英語とは言えません。ただし海外では、ウミガメ関係者をこう呼ぶことがあります。ウミガメを守りたい人や、ウミガメを研究したい人、立場上仕事でウミガメに関わるようになった人、ウミガメが好きの人など、ウミガメに関わる全ての人を、我々はマリン・タートルと呼ぶことを提唱したいと思ひます。

 Marine
Turtler

Contents

ウミガメ基礎講座 28	ウミガメの食性について 亀田 和成	3P
水族館とウミガメ	串本海中公園 吉田 徹	5P
各地のマリンターラー紹介	一宮ウミガメを見守る会 渡部 明美	7P
日本ウミガメ会議	第30回日本ウミガメ会議みなべ大会を終えて 前田 一樹	9P
もしもし亀屋さん♪亀屋さんよー♪	海人三郎を訪ねて 若月 元樹	11P
各地からの報告		
事務局	紀伊半島ウミガメ情報交換会の30周年記念誌ができました 松宮 賢佑	12P
むろと廃校水族館	心躍るオサガメ調査 田中 優衣	13P
黒島研究所	ウミガメ調査の砂浜から 中西 悠	15P
新人紹介	むろと廃校水族館 米田 彩花 / 岩佐 翔馬	16P

ウミガメの食性について

黒島研究所 亀田 和成

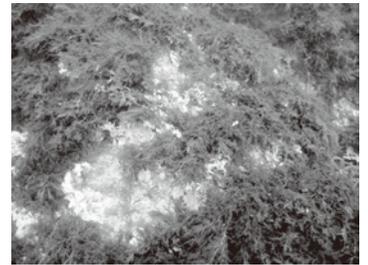
ウミガメは種類によって食べるものが異なります。例えば、アカウミガメはカニやエビなどの甲殻類、アオウミガメは海草・海藻、タイマイは海綿（カイメン）を食べています。ウミガメが好きな人なら、この餌の違いは知っていると思います。今回は、ウミガメの餌の違いについてもう少し詳しくお話しします。

最初はアカウミガメです。日本は北太平洋で唯一のアカウミガメの産卵地です。日本で生まれたアカウミガメは太平洋を横断し、メキシコ沿岸で成長します。このメキシコ沿岸にはコシオリエビの仲間がたくさんいて、主にそれらを食べています。その後、太平洋を横断して日本に戻ってきます。日本に戻ってくると、2つの餌場に分かれます。一つは太平洋側でこちらの餌場では、浮遊性のホヤやクラゲ類を食べています。もう一つの餌場は東シナ海で、底生性のカニやヤドカリなどを食べているそうです。一度、餌場を決めたアカウミガメは、少なくとも数年はその餌場を利用します。人で言えば、行き付けの居酒屋を決めたら他のお店にはいかない、という主義のようです。同じ日本生まれのアカウミガメたちが、どのような基準で二つの餌場に分かれるのか、未だに謎で、有力な仮説もない状況です。



浮遊性のホヤ

次に、アオウミガメはウミガメ類で唯一のベジタリアンです。あまり知られていませんが、日本沿岸はアオウミガメにとって成長の場です。太平洋岸を中心に、海には青年期のアオウミガメがたくさん生息しています。日本本土では主にマクサを食べています。マクサはテングサとも呼ばれ寒天の原料として有名です。本土で見つかるアオウミガメの胃内容物のうち8割がこのマクサで占められています。一方で、南西諸島の奄美群島よりも南側のアオウミガメは、海草と呼ばれるアマモの仲間と、海藻のシマテングサ、ミル、ヒトエグサ、キリンサイなど多様な種類を食べています。



マクサの群落

南西諸島で餌となる海藻種は、季節によって繁茂する時期が異なるので、季節に応じて多い海藻を食べているようです。例えるなら、ウミガメたちの食卓にも季節に応じた旬があるということです。食べる海藻の中で注目したいのがシマテングサです。シマテングサは、海底にこびりつくように生えていて、多くは有孔虫（ホシズナなど）に覆われていて見え難く、小さく、硬く、とても美味しそうには見えません。アオウミガメが良く食べているミル、ヒトエグサ、キリンサイなどは、柔らかくボリュームもあって、人も食用としています（ミルについては、今は利用していないので食用とした歴史がある、といったところでしょうか）。実はシマテングサは、見た目は全然違うのですが、本土に住むアオウミガメの主食であるマクサと同じテングサ科に属します。もしかすると、テングサ科には、アオウミガメが好む成分があるのかもしれませんが。また、アオウミガメの胃の中からはギンクラゲやホンダワラが出て

くることがあります。このギンカクラゲは水面に生息し、ホンダワラは流れ藻になります。このため、アオウミガメが摂餌場所を変えるための移動中に食べるが多いようです。また、地域によってはアオウミガメがクラゲやホヤばかり食べている場所もあるそうです。アオウミガメは野菜しか食べないというよりも、何でも食べるけど野菜好き、と言った方が適切でしょう。



クラゲを食べようとするアオウミガメ

タイマイはカイメンを食べる珍しい動物です。カイメンは体の中にガラス繊維を含み、毒素をもっている種が多くいます。このため、カイメンを食べる動物種はとても少なく、何種かのエビや魚が知られているのみです。タイマイはカイメンを食べるように進化したことで、他の動物と餌資源の競争をしなくて済むわけです。だから、いつもタイマイはお腹いっぱいカイメンが食べられる、と考えていたのですが。実際に八重山諸島でタイマイの胃内容物を調べてみると、食べられるカイメンの種は限られていて、ナンコツカイメンの仲間ばかりが見つかります。ナンコツカイメンは死んだサンゴ片が積み重なってできた隙間に居ますが、私たちがダイビングで探しても全然見つかりません。頑張って探しても、1時間で2・3個みつければ良い方です。そして、八重山のタイマイの胃内容物からは、カイメン以外にも海藻のミルやイソギンチャクもよく出てきます。これらのことから、八重山に住むタイマイは、好物のカイメンが少ないので、他の餌も合わせることで食を満たしているのだと思っています。



ナンコツカイメンの仲間

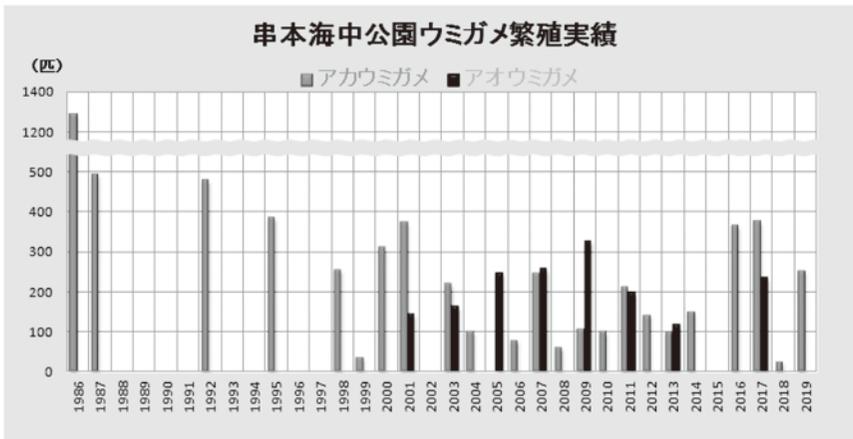
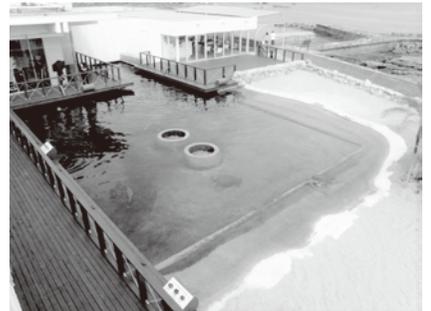
ここまで読んだ方はもうお気づきだと思いますが、実はウミガメは何でも食べる動物です。最初に書いたアカウミガメは甲殻類、アオウミガメはベジタリアン、タイマイはカイメン食というのは、あくまで主な食べ物の話です。水族館では、種を問わず、魚の切り身やイカを与えていることが多いですし、それで健康に飼育できます。以前、ヘッドスタートしたウミガメ、つまり水槽の中しか知らないウミガメを、海に放流してシュノーケリングで追跡しながら行動を観察したことがあります。アオウミガメとタイマイの2種でしたが、2種ともに岩をかじってみたり、海藻をかじってみたり、とても好奇心旺盛で、食べられそうなものはかじってみる、といった感じでした。おそらく、とりあえず食べてみるころから、徐々に餌を選択していくのだと思います。そして、空腹になれば、何でも食べられる体質を利用して餌不足を凌ぐのでしょう。こう考えると、ウミガメは特定の餌を食べることで種間競争を避けながら、様々な餌を食べられる柔軟性によって環境の違いにも耐えられる動物と言えます。

「串本海中公園でのウミガメ繁殖」

串本海中公園 吉田 徹

串本海中公園は、紀伊半島の先端、本州最南端の町串本に位置する水族館です。串本は日本で最初の海中公園地区（現海域公園地区）に指定された区域であり、その海中景観や生物を紹介するため 1971 年に水族館が設立されました。ですので、串本海中公園で飼育されている生物は全て串本近海に生息している種となっており、ウミガメもその中にあります。串本の海では多数のウミガメが見られますが、最も多いのは亜成体のアオウミガメで、運がよければ水族館の観光船や海中展望塔からも見る事が出来ます。さらに、5 月後半からは産卵に来たアカウミガメが現れるようになり、7 月終わり頃まで町内各地の砂浜で産卵の痕跡が確認されていますが、近年はだいぶ産卵回数を減らしています。

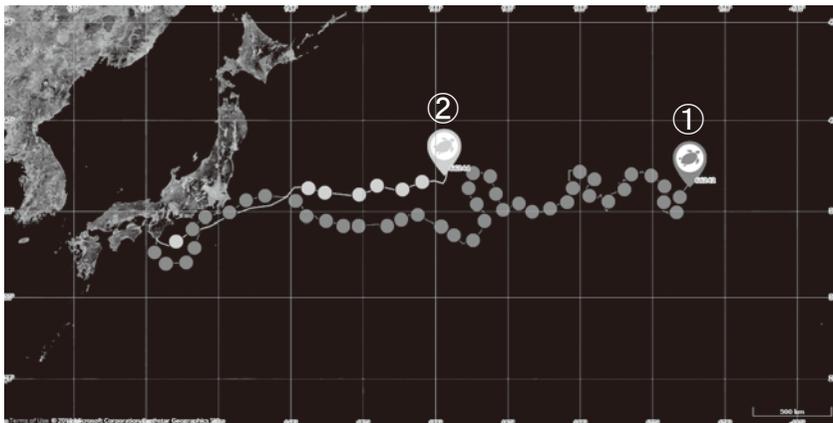
水族館では、開館当初より屋外ウミガメプールでウミガメの飼育を行っており、主に串本町内で混獲されたアカウミガメ、アオウミガメ、タイマイの飼育を長年行ってきました。1986 年には人工産卵場を造成しウミガメの繁殖に取り組み始め、2007 年には産卵場を増設し現在は新旧 2ヶ所の産卵場で毎年ウミガメの産卵が確認されています。アカウミガメは人工産卵場を造成した 1986 年から産卵が見られ、アオウミガメは 2001 年から産卵が見られています。タイマイは、残念ながら現在雌しかいませんので産卵はありません。1995 年にはアカウミガメの繁殖賞を受賞し、この時生まれた個体が成長し産卵を行うようになり、2010 年には初めて（野生から搬入された個体を親世代とすれば）孫世代のアカウミガメが誕生しました。現在この孫世代は 9 才となり、産卵の兆候を見せ始めています。そろそろひ孫世代のアカウミガメ誕生が期待出来るかもしれません。



串本海中公園で繁殖したウミガメの多くは、1～2 年程成長させてから標識を装着して放流しています。しかし、標識を装着した個体が再び見つかる事は非常に稀です。何しろ再発見されるのは殆どが混獲された時か死亡して漂着した時ばかりで、順調に生活していればいるほど我々人の目に触れる事がありません。ですので、これまでに 1000 匹近く繁殖したウミガメを標識放流していますが、再発見され

た例はごくわずかです。それでもこの再発見事例を徐々に蓄積していく事により、ウミガメの研究や保護に繋がっていくと期待しています。また数少ない再発見事例の中には、放流から 13 年という長期間経過して再発見される事例もいくつか確認されています。最終的には何処かの砂浜で、産卵に来たウミガメに当館繁殖個体の標識が、となれば感無量ですが、それには少なくとも 20 年以上は掛かる見込みですからまだまだ先は長そうです。

この標識放流は、当然ですが放流時と再発見時の 2 点の情報しか得る事が出来ず、その間の移動経路は不明です。そこで、最近ではアルゴス発信機を装着して放流し衛星追跡する試みも行っています。1 回目は 2018 年 11 月に、当館で繁殖した 2 才の子供のアカウミガメに発信機を付けて放流しました。野生の個体であれば太平洋を横断する大回遊を行っている最中ですが、繁殖個体も同様に大回遊に行くのかを調べるのが目的です。2 回目は 2019 年 5 月に、同じく繁殖したアカウミガメで 23 才の成体を放流しました。この個体は 1995 年に生まれ、23 年間水族館で飼育し人工産卵場で産卵を行うようになっています。この個体を産卵期直前に放流した場合、野生でも産卵をするのか、どこで産卵するのか、さらに産卵期後の回遊は野生個体と同様なのかを調査するのが目的です。結果としては、残念ながらどちらも想定より短期間で追跡が終了するやや中途半端な結果となってしまいました。子ガメは、野生個体と同様に黒潮の流れに乗り一目散に東へ進み大回遊へと向かうのが確認され、これは予想通りの結果でした。一方、成体の方は非常に意外な結果となりました。当初の予想としては、産卵地を物色しつつ西へ向かい、産卵期後は多くの野生個体と同様に東シナ海へと向かうのでは無いかと思っていましたが、結果はその真逆でした。陸地にはいっさい目もくれず、黒潮の流路に乗り日本から離れて行ってしまいました。これはまさに子ガメと同様に大回遊へと向かうかのようでした。水族館で生まれて成長したアカウミガメは、当然ですが野生個体のように大回遊を経験していません。もしかすると飼育下で成体まで成長したとしても、経験していない大回遊へと向かおうとする本能があるのでしょうか。しかし、今回成体の信号が途絶えた場所は、野生のアカウミガメの一部が生息する海域でもあります。今回の結果からは、この後この海域に留まったのか、もしくは大回遊へ向かったのかは判断出来ませんでした。せめてあと一ヶ月ほど追跡が続けば明確になっただけに、大変残念でなりませんでした。今後成体の方の放流は再び試みたいですが、この放流は大変コストが掛かります。発信機の値段はもちろん結構な金額ですし、何より産卵するまで成長した繁殖個体自体がとても貴重です。それでも今回の続きを知る為に、またせっせとウミガメを飼育しつつ機会を待ちたいと思います。



アルゴス放流の軌跡 ①が 2 才 ②が 23 才

一宮ウミガメを見守る会

渡部 明美

一宮ウミガメを見守る会は、太平洋のアカウミガメの産卵北限域に位置する千葉県九十九里浜南端の一宮町で、元東邦大学教授 秋山章男先生が 1994 年から始めたウミガメの上陸産卵調査を引き継いで、2012 年に発足いたしました。ウミガメの生態を妨げず見守る姿勢を基本理念に、調査・保護・普及啓発に取り組んでいます。毎年 5 月から 9 月、約 7 km の砂浜をウミガメの足跡を探して朝早く歩き、その足跡から、上陸の軌跡・産卵の有無・後ろ足跡幅の大きさなどを記録し、産卵している場所に囲いをして、子ガメの旅立ちまでを見守ります。



一宮海岸



孵化調査

2019 年 7 月 10 日、一宮町を代表する十二社祭りの祭典会場であり、2020 年の東京オリンピックのサーフィン競技会場でもある釣ヶ崎海岸で、シーズン初のアカウミガメの産卵がありました。例年 6 月の初めくらいから始まる上陸が今年は無かったため、待ちに待った産卵でした。

首都、東京に近いことで人口も多く自然が失われやすい千葉県に、アカウミガメが産卵に来るような豊かな自然環境が残っていることを知ってもらいたい、そしてそれを次世代にも渡せるように守っていききたい。そのためには、より多くの方々に伝えることが大切だと思い、2019 年 5 月に日本テレビ「志村どうぶつ園」の密着取材のお話をお引き受けしました。オリンピックの 1 年前ということで、新聞な

どもにもたくさん掲載していただきました。新聞記事やテレビ放映がどんな風に伝わるのか、正しくウミガメや自然環境にとって良い方向に伝わることを期待しました。撮影はありのままの現状を撮っていただくだけなので大変なことはありません。それでも、私たちの発言や行動がきちんと伝わる努力は必要でした。残念ながら孵化はありませんでしたが、放送をご覧になったウミガメのことに詳しい皆さんから見ていかがでしたでしょうか？少しでも一宮のウミガメと自然環境について伝わったでしょうか。



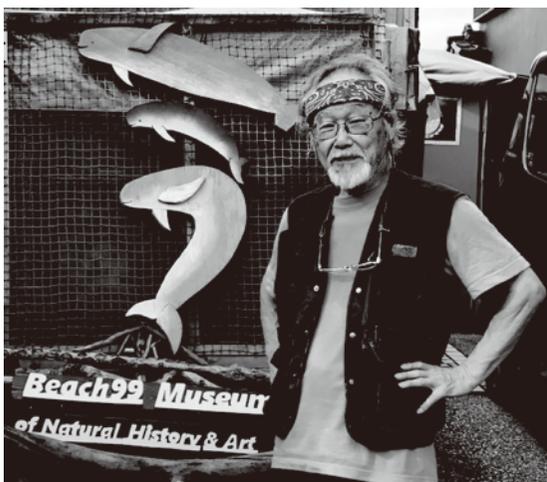
釣ヶ崎海岸での産卵

知ってもらったあと、その後どう行動していくのかがもっと大事だと考えています。活動が続いていくように、仲間づくりをすること、後継者を育てること、今後は、そのようなことにも力をいれていこうと考えています。

2015年に開催された『第26回日本ウミガメ会議 in いちのみや千葉』の記念講演『南九十九里一宮・渚の自然を探って40年』で、南九十九里浜の概要と長きにわたりこの地域で実施してきた生態調査の結果をもとに楽しく学べるお話を聞かせていただいた恩師 秋山章男先生が10月17日に他界されました。大好きな先生でした。先生との最後のメールでいただいたお言葉「初心を忘れずに！」をいつも心にとどめて、大切にして、活動していきたいと思っています。ここでみなさまにお知らせするとともに、あらためてご冥福をお祈りいたします。



イベントでの広報活動



秋山章男先生



一宮ウミガメを見守る会 秋山先生を囲んで

第30回日本ウミガメ会議みなべ大会を終えて

みなべ町教育委員会 前田 一樹

第30回日本ウミガメ会議みなべ大会に、全国各地から大勢のご参加をいただき、ありがとうございました。心よりお礼申し上げます。

初日は、午後から千里の浜にて恒例の浜見学に加え、ふ化率調査体験と解剖教室を企画しました。この日のために残しておいた産卵巣が台風で流されていないか心配しましたが、2巣掘ることができました。解剖教室も盛況で、千里ウミガメ館の展示室は満杯でした。



みなべ千里の浜



ウミガメ解剖教室

夜は会場を国民宿舎・紀州路みなべに移し、前夜祭を開催しました。せっかく全国からみなべ町にお越しいただくので、みなべらしいものを召し上がっていただこうと、運営委員会でメニューを練りました。宿舎の担当さんや料理長には随分と無理を聞いていただき、普段のメニューに無いものも用意していただきました。宿舎で用意できない料理や食材は、運営委員会の皆さんのご協力を得て、持ち込ませてもらいました。お陰様で、みなべ大会特製のおもてなしメニューが提供できました。



前夜祭

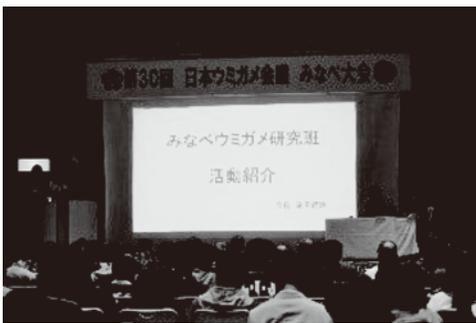


みなべ特産の梅や魚を使った料理

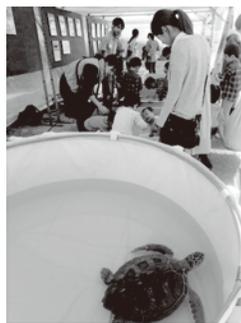
2日目からの会議は、ホテル&リゾート和歌山みなべで開催しました。開会式に続いて、セッション「紀伊半島のウミガメ」では紀伊半島各地で活動している各団体から状況報告、日本のウミガメ2019では今シーズンの上陸・産卵のまとめ報告、ミニシンポジウム「海洋ゴミとウミガメ」では専門家4名から事例報告、ポスター発表では21題の掲示がありました。

また、会場の外には「すさみ町立エビとカニの水族館」と「和歌山県立自然博物館」に移動水族館&博物館に来ていただきました。ウミガメや海の生き物のタッチングプールに、子供だけではなく大人も非常に興味を持って触っていただくことができました。

2日目の夜の懇親会では、西岩代地区に伝わる、西岩代の獅子舞（和歌山県指定無形民俗文化財）に華を添えていただきました。ホテルの豪華な食事に舌鼓を打ちながら、最後は恒例のオークションで盛り上がりました。



口頭発表



移動水族館



西岩代の獅子舞

最終日の口頭発表では12題の報告があり、盛り沢山の大会は幕となりました。

協議会から大会開催の打診があったのは去年の夏でした。26年ぶりにみなべでの開催が決まり、取り急ぎ、療養中の後藤清先生に報告に伺いました。「そうか、そうか。」と、たいへん喜ばれていました。「ウミガメ会議の日には、連れ出しに来ますよ。」と約束したのですが願いは叶わず、令和元年10月3日に逝去されました。今回の会議も、どこかで見守ってくれていたと思います。ご冥福をお祈りします。

みなべ町にとっても節目となる大会となりましたが、無事終えることができました。ご協力いただいた関係者の皆様方に感謝申し上げ、報告とさせていただきます。では来年、沖縄でお会いしましょう。



みなべウミガメ研究会 後藤先生を囲んで

海人三郎(うみんちゅサブロー)を訪ねて 下地清栄さん

むろと廃校水族館 若月 元樹

情熱大陸などでも紹介された有名人なので知っている方もいらっしゃるかも知れません。石垣島の漁師・下地清栄(しもじせいえい)さんをご紹介します。下地さんは素潜り漁師として石垣島では有名な海人です。三郎という愛称で親しまれています。

昔、下地さんと飲んだ時、あるウミガメ専門漁師の名前を挙げ、「俺はもっと獲れる」と豪語されました。私は、小学生の頃から存在を知っていた海人三郎に対し、若さとアルコールも手伝って「ウミガメ漁はそんなに簡単なものではない」と生意気なことを言ったのでした。

数年後、漁協を通して下地さんにアオウミガメの捕獲を依頼したところ、アオウミガメを満載した船が入港してきました。昔の宴席で私は下地さんのプライドを傷つけていたようで、船が着岸した瞬間に「お前、あの時“獲れるものなら獲ってみろ”って言ったよなー！」といきなり怒鳴られました。以降、下地さんには定期的にウミガメを獲ってもらっています。12月の早朝、黒島港に注文したアオウミガメを届けに下地さんの船が入って来ました。マリンタートラーへの登場を打診したところ、「いいよ。でも科学者(ここではウミガメ関係者のこと)は嫌い」と快諾(多分)して頂きました。

「どうして嫌いなのか？」と聞くと、「だってあいつらウミガメが絶滅するとか言うからさー」「海にいっぱいいるのによ」「陸上でも養殖している時代なのによ」。次回のウミガメ会議は沖縄。嫌いな人たちの前でしゃべってくれないだろうか…



紀伊半島ウミガメ情報交換会の30周年記念誌ができました

事務局 松宮 賢佑

紀伊半島ウミガメ情報交換会は、和歌山と三重で活動するウミガメ関係者が、お互いに連携し、情報を交換し、学び合いながら活動していくことを目的に 1990 年に組織されました。そして、年に一度、紀伊半島各地のウミガメ屋が集まり、「紀伊半島ウミガメ情報交換会」が開催されています。

2019 年の 1 月には、情報交換会発足 30 周年のシンポジウム「紀伊半島ウミガメ情報交換会・ウミガメシンポジウム」が和歌山県みなべ町で開催され、事務局からは、会長の松沢、松宮、平井、一野が参加しました。そしてこのシンポジウムの際に、紀伊半島ウミガメ情報交換会の濱野兼吉さんから 30 周年誌を作成したいと相談があり、紀伊半島のウミガメ屋の活動に少しでも貢献できればという想いで編集の任を引き受けました。

濱野さんたちと打合せを進め、発行は日本ウミガメ会議みなべ大会に間に合うよう 11 月上旬に、内容は皆さんから届いた原稿を全て掲載することに決め、本格的な編集作業が始まりました。不慣れな作業で入稿ギリギリまで編集が続きましたが、たくさんの方に助けていただき、何とか、日本ウミガメ会議に併せてボリューム満点の記念誌を発行することができました。

この記念誌編集を担当したことで、紀伊半島各地のウミガメ屋の皆さんと色々なお話しができました。その中でも串本海中公園の宮脇逸朗さんのお話しはとても興味深く、印象的でした。宮脇さんは、紀伊半島ウミガメ情報交換会発起人の一人であり、串本海中公園で長年ウミガメに携わってこられた方です。記念誌には宮脇さんから聞いたお話の一部も掲載させていただきました。

貴重な経験を積むことができ、記念誌編集を任せていただいたことに深く感謝いたします。また、発行にあたりご協力いただいた皆様には心から感謝いたします。

紀伊半島ウミガメ情報交換会が発足した 1990 年から現在までの経過をまとめた記念誌です。各地の活動報告や貴重なデータ、過去の記事など、これまで紀伊半島でウミガメに携わってこられた皆様の想いが詰まった 1 冊です。ご希望の方は、日本ウミガメ協議会事務局までご連絡ください。



紀伊半島ウミガメ情報交換 30 周年記念誌
『紀伊半島ウミガメ情報交換会 ~ 30 年のあゆみ ~』
2019 年 11 月 5 日発行, A4 判, 160 項

心躍るオサガメ調査

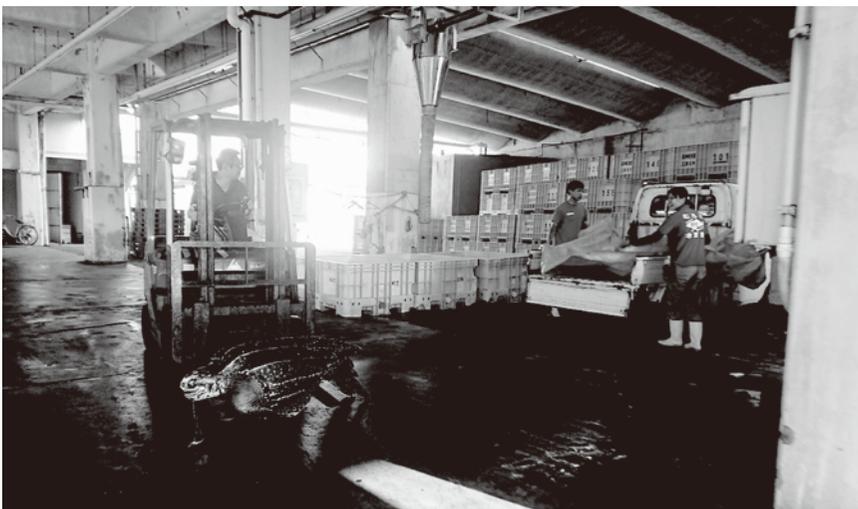
むろと廃校水族館 田中 優衣

マリントーターであれば、1度は思ったことがあるのではないのでしょうか。「オサガメを見てみたいいな…。」その願い、今夏に高知県で滞在していれば叶っていたかもしれません。なぜなら今年は3頭のオサガメの発見情報が入ったからです。

むろと廃校水族館では高知県室戸市で椎名・三津・高岡漁協の大型定置網に混獲されるウミガメ類について調べています。毎年200頭ほどのウミガメ類が確認されており、アカウミガメ、アオウミガメ、タイマイ、ヒメウミガメ、クロウミガメ、そしてオサガメといった、日本に来遊するウミガメ全種が見られます。室戸は彼らの生態を知るための非常に貴重なフィールドであり、2003年から当協議会の職員が常駐して調査を行なっています。過去の調査結果より、室戸ではオサガメは5～10月に多く混獲されています。そのため、私は5月に入ると高知のどこかでオサガメが目撃されるのではないかと期待してしまうのです。

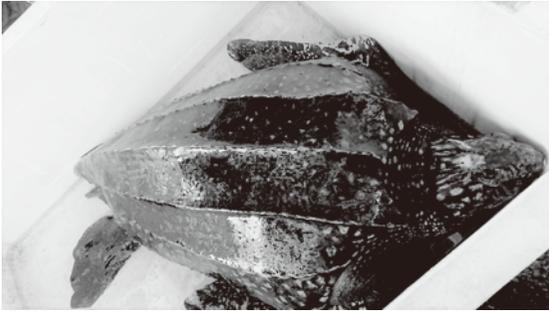
今年9月の早朝、地元の定置網の漁師さんから私の携帯に写真が送られてきました。普段見慣れているウミガメとは違って黒い体に白点がちらばり、隣に置かれた漁港の籠と見比べるとはるかに大きい…「オサガメ！」とつい叫んでしまいました。残念ながら死んでいるとのことでしたが、個体を引き取るためにすぐに現場へ向かいました。漁港に着くと、数百kg以上ありそうな個体が横たわっていました。当館へ搬入するために人力で動かそうと4人がかりで試みましたが、持ち上がるはずがありません。その様子を見かねた漁師さんがフォークリフトで軽トラに乗せてくれました。

オサガメは他のウミガメとは異なり、鱗板で覆われた固い甲羅を持っていません。実際に触ってみると、まるでゴムのような感触でした。またクチバシはとても鋭いです。とがった部分を使ってクラゲなどの無脊椎動物を突き刺して食べると言われています。解剖調査で胃袋を開いてみると、サルパ類が出てきました。また、室戸では8月に再度オサガメの混獲がありました。

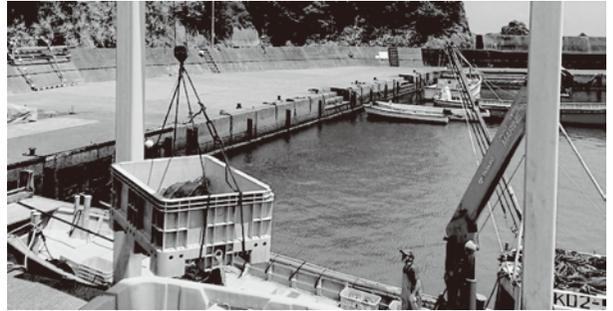


フォークリフトで運ばれるオサガメ

もう 1 件の情報は県西部からでした。「オサガメの情報が西から入った。しかも生きています！今すぐに準備して行け」と館長の若月。その時は目的地が明確ではなかったため、とにかく高知市へと車を走らせました。高知県の端から端への距離はとても長く、“どこでもドア”が本当に欲しいと感じる道のりでした。やっとの思いで到着すると、そこには漁師さんの他に高知大学の齊藤先生や同大学のウミガメ同好会がすでに到着し、体サイズの計測、そして標識タグ装着もほとんど終えているところでした。迅速な対応のおかげで速やかに調査が終了し、オサガメが収容されたタンクはクレーンによって船に乗せられ、漁師さんが沖で放流してくれました。オサガメの状態は大きな擦り傷等がなく、綺麗な姿でした。私はオサガメがヒレを力強く動かす様子を見て「生きています！」ということを実感し、この体で水深1200mも潜ることができるのかと興奮しました。今はどこの海を泳いでいるのでしょうか…。



県西部で見つかったオサガメ



クレーンで釣り上げて船へ乗せる

このように日本では毎年、数例のオサガメのストランディングや混獲情報が入ってきます。絶滅危惧種のオサガメは、太平洋での個体数の減少が深刻な問題で、謎に包まれた暮らしを明らかにしていくことが重要です。混獲調査の貴重な情報源は漁師さんです。「このカメそんなにすごいのか？珍しいのか？」と言いながらも、面白い情報をたくさん持ってきてくれます。室戸では漁業者と研究者との協力体制が築かれており、珍しい生き物が発見されると連絡をいただくことができます。

高知の夏、オサガメに会えるチャンスがあるかもしれません。興味のある方には是非、訪れてほしい場所です。

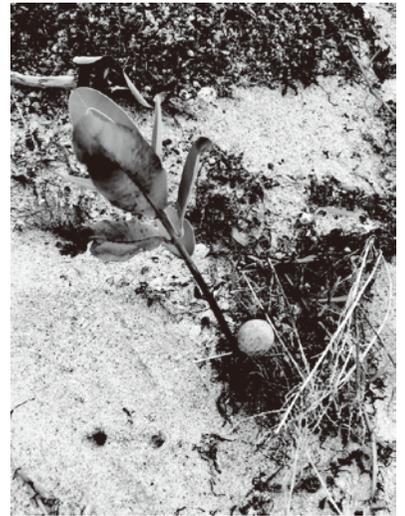
ウミガメ調査の砂浜から

黒島研究所 中西 悠

私は植物を専門としています。ウミガメ協議会にしながら植物が好き。お客さんに展示の解説をしていきなりこの話をするとよく驚かれます。海洋生物ならまだしもなんでまた植物と、でも実は植物に興味を持つきっかけはウミガメにあります。

大学のころから植物に興味を持ち始めたのですが、入学当初はまるでそんなつもりはありませんでした。最初は魚類を研究したいと思い琉球大学に入学しました。その後先輩の勧誘でウミガメ研究会ちゅらがーみーに入ります。

ウミガメ研究会のフィールドはほとんどが砂浜です。砂浜を歩いてウミガメの産卵跡を探します。しかし毎回ウミガメの産卵があるわけではありませんし、結構な距離を歩くことになります。ただ歩くだけでは退屈ですが、先輩方は歩きながら砂浜の面白いものをたくさん教えてくれました。打ちあがった魚やウニの骨格、様々な漂着ゴミなどなど…。その中にあったのが漂流して海を渡る漂着種子です。よく見て歩くといろんな種類の漂着種子があるのがわかります。そのあとの大学の授業で勉強したこともあり、私は漂着種子の名前を覚えていきました。植物を覚えてくると今までの浜の見え方が変わってきます。知っている種、知らない種、ウミガメ調査のついでに色々な海岸植物を覚えていきました。いままで何気なく見ていた身近な植物の名前がわかると、こんなにも生活が楽しくなるのかと植物が好きになりました。



芽が出ている漂着種子

そして黒島研究所で働き始めても、やはりウミガメ協議会に植物好きなんていません。魚専門の上司と砂浜を歩いても、海をみて「魚がはねた。サメか…」それに対する私は正反対の陸を見ているので「え？」です。植物と無縁のような環境。でも分野がかぶっていないおかげで、私だけの解説に活かしています。ツアーで研究所の庭の植物解説をすると、身近な植物の生態やおいなどの特徴に意外にも皆さんが話に興味をもってくれます。この前は島の小中学校に呼ばれ、野草を食べよう講座を開いてきました。その名の通り、講座では島中に生える食べられる植物を児童たちと取ってきて、料理し食べるというものでした。これが意外に「この植物よく見ていたけどこんなにおいしいのか！」と好評で、今後島中の食べられる植物がなくなるんじゃないかと思ったほどでした。

今の私のやりがいを見つけるきっかけになった砂浜。今年の産卵シーズンは終わってしまいましたが、また何か面白い発見を探して歩きます。

むろと廃校水族館 米田 彩花

鹿児島大学を卒業し、日本ウミガメ協議会に入りました。室戸に配属となり、小さい頃からの夢だった水族館で働くことにワクワクしていましたが、実際働き始めると、知らない魚が多く、エサを食べてくれなかったり、少しの環境の変化で弱ってしまったり、魚を飼育するのは簡単ではないと知りました。

黒島研究所で研修をさせてもらいました。大学時代ほとんど研修を行ってこなかった私には知らないことだらけの研修でした。今までは何も考えず水槽にエサを入れることしかしていなかったと気づきました。岩場に棲む魚には水槽の中に岩を入れたり、野生で食べているものをきちんと調べてエサをあげなければならぬと知りました。廃校水族館でも魚1匹1匹をよく観察し、責任を持って大切に飼育していきたいと思えます。

これから、私の好きな生き物や海の魅力、面白さを伝えていきたいです。そのために、まず私がおっと室戸の海を知り好きになろうと思います。室戸に住んで半年以上がたちましたが、室戸の海の中を見たことがありません。漁師さんから魚をもらうのを待つだけではなく、自分で釣りに行ったりして室戸の海や魚を見て食べて勉強していきます。



むろと廃校水族館 岩佐 翔馬

高校までは動物園の飼育員になろうと決めてました。ですがある夏の日、ふと「汗っかきの僕が炎天下の動物園では死ぬのではないか」と思い始め、そこから水族館の道へ。結局は、室戸に来てウミガメ調査で炎天下の砂浜を歩いたりしています。

ウミガメと初めてちゃんと関わったのは専門学生時代に調査の研修で行った千里浜でした。夜通し歩いて初めて見たウミガメの産卵は今でも覚えています。月明かりにだけ照らされた黒い海から、大きな塊が砂浜に上がり、ズズッと音を立ててゆっくりと産卵に適した場所を探す。それから砂を掘るのにはあまり適さないように見える後脚で、深い穴を掘り産卵する。誰に教わったでもなく行われるその行為は、長い進化の歴史をかけてウミガメ達が見つけた子孫繁栄の最適解なのだと深く感動しました。

専門学校卒業後、名古屋港水族館と釧路水族館で働いてきました。水族館の仕事には慣れたと思っていたのですが、室戸は驚きの連続でした。ある日いつも魚をとってくれる漁師さんから「魚が獲れた」と電話があり、大きなシイラとトビエイをもらいました。これら水族館では貴重な大型魚を、まるで小魚でも獲れたかのように「魚」と一括りにすることに驚きました。しかし、そんな事は日常茶飯事、漁港では「ほれ、やる。」と言って貴重な深海魚のアカグツを投げて渡してくる人もいました。ここにいると魚の価値観が変わりそうです。

室戸の海に多くの可能性を感じます。私がやるべき事はその可能性と海の豊かさを多くの人に知ってもらう事だと思っています。お世辞にも飼育レベルが高いとは言えない僕ですが、この恵まれたフィールドで多くの事を学び、世間や来館者に伝えていくことが出来たらと思っています。



STSmembers募集中!

STS(SeaTurtleSupport)membersは、ウミガメと共に生きていける自然、環境について考え、その研究・保護活動に協力する人々の集まりです。日本ウミガメ協議会では、当会をサポートして下さるSTSmembersを随時募集しております。

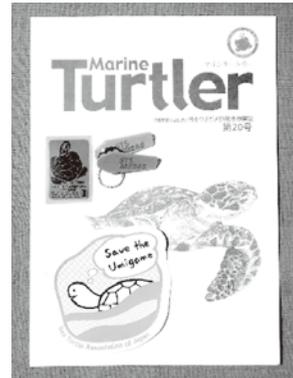
皆様のお知り合いで自然が好きの方、海が大好きな方、ウミガメに興味をお持ちの方がおられましたら是非入会をお誘い下さい。

入会金:なし

年会費:個人会員3,000円、団体会員10,000円、特別会員100,000円

会員特典:オリジナル会員証&グッズ

機関誌(MarineTurtler)のお届け、ウミガメ速報の配信



ご寄付をいただいた方々

シャディ(株)、四国コココーラボトリング(道の駅日和佐・かめたろう)、玉岡昇治、ヤフー(株)、山下宮子、マノリサ、松村正子、白崎野百合、福原富士美、高根歩美、前田直美、ライオン(株)、太田英利、池村茂、和田素子、清水すみゑ、大川順也、串本海中公園センター、坂東武治、小林雅人、富充徳、南知多ビーチランド、奥田恭子、豊島(株)、池田直子、松原彩花、米光健太、イノウエアサコ、太田尚子、前田陽光、小林雅弘、宮脇逸朗、紀伊半島ウミガメ情報交換会、ニチレイマグネット、国民宿舎紀州路みなべ

そして、事務局、黒島研究所、みなべ基地、むろと廃校水族館に募金&差し入れをくださったみなさま
(ご寄付をいただいた順、敬称略)



編集後記

今号より編集を担当しています平井と申します。よろしくお願ひします。担当するにあたって今まで発行されたマリンタートルをすべて読み返しました。率直な感想は「なんて面白いんだ!」。初号から続々と登場するウミガメを愛する変人…失礼しました、ちょっと変わったマリンタートルの皆さんの想いがビシビシ伝わってくる熱い文章を読んで、私も負けていけない!と気合いが入りました。大先輩方の想いを引継ぎ、STSの皆さまへたくさんのウミガメ情報をお届けすべく、アンテナを張り巡らせようと思います。

事務局 平井 紗綾



マリンタートル(日本ウミガメ協議会機関誌)

発行日 2020年1月1日
発行 日本ウミガメ協議会

〒573-0163 大阪府枚方市長尾元町5-17-18-302
電話:072-864-0335 Fax:072-864-0535
URL <http://www.umigame.org> E-mail info@umigame.org